

えだまめでダイズサヤタマバエの発生が多い

～中晩生以降の品種では防除の徹底を～

1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

7月中旬に行ったえだまめ早生品種の巡回調査（7地点）におけるダイズサヤタマバエの被害率は0.4%（平年0.0%）で高く、被害地点率は28.6%（平年18.8%）で平年並だった（表-1）。

7月27日に仙台管区気象台から発表された東北地方1か月予報によると、向こう1か月の気温は高いと予報されている。

開花日が遅い品種ほど、被害率が上がる傾向があることから、7月下旬頃から開花日を迎える中晩生以降の品種において、被害の拡大が懸念される。そのため、防除対策を徹底する必要がある。

2. 防除対策

- 1) ダイズサヤタマバエの幼虫に食入された莢は、奇形や肥大不良になる（図-1）。成虫（図-2）による産卵は主に花卉が枯死してから莢長が1.5cm程度の稚莢になるまでに行われるため、開花日※を基準とした薬剤散布を行う（表-2）。
- 2) 中晩生品種では開花日10日後頃に1回、晩生品種では開花日7日後頃及び14日後頃の2回、アールバリン顆粒水溶剤／スタークル顆粒水溶剤を散布する。無人航空機で防除する場合は、スタークル液剤10／スタークルメイト液剤10を散布する。
- 3) 中晩生品種又は晩生品種でスミチオン乳剤、トレボン乳剤、ダイアジノン粒剤5を使用する場合は、開花日頃～開花日7日後頃に2回散布する。
- 4) 乳剤、顆粒水溶剤の散布液量は200～300L/10aとし、莢によく付着するように散布する。また、粒剤を使用する場合は、ほ場全体に均一に散布する。
- 5) 今年はえだまめの生育が早く、開花も早まると予想されるため、ほ場をよく観察し防除適期を逃さないようにする。

※開花日：ほ場全体で50%程度の開花が確認された日

3. 資料

表-1 えだまめ早生品種の巡回調査におけるダイズサヤタマバエによる被害状況（7月中旬）

	被害率 (%)	被害地点率 (%)
2023	0.4	28.6
平年	0.0	18.8
概評	多	並

※平年は7月下旬調査を含む



図-1 ダイズサヤタマバエによる被害莢



図-2 ダイズサヤタマバエ成虫

表-2 ダイズサヤタマバエの防除薬剤

農薬名	希釈倍数・ 使用量	使用時期	本剤の使用回数	各成分の総 使用回数	散布時期
アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤	2,000倍	収-7日	2回以内	ア	中晩生品種:開花日10日後頃 (1回)
スタークル液剤10(無人航空機) スタークルメイト液剤10(無人航空機)	8倍				晩生品種:開花日7日後頃及び 14日後頃(2回)
スミチオン乳剤	1,000倍	収-21日	4回以内	4回以内	
トレボン乳剤	1,000倍	収-14日	2回以内	2回以内	中晩生品種・晩生品種: 開花日頃~開花日7日後頃 (2回)
ダイアジノン粒剤5	6kg/10a	収-30日	4回以内	イ	

※同一符号は同一成分が含まれていることを示す。()内は各成分の総使用回数を示す。

ア:ジノテフラン(3回以内(は種時の土壌混和は1回以内、散布、空中散布、無人航空機散布は合計2回以内))

イ:ダイアジノン(6回以内(種子粉衣は1回以内、粒剤は5回以内(生育期の処理は4回以内)))

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所 TEL 018-881-3660
 秋田県農業試験場 TEL 018-881-3326
 掲載HP <https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/>